

「モンタナ州のベア・スペシャリストと考える野生動物管理の担い手」

特別 Q&A 集

～ シンポジウムでの質問票への回答と、現場で役立つ共生の視点 ～

2026年4月29日に酪農学園大学にて、シンポジウム「モンタナ州のベア・スペシャリストと考える野生動物管理の担い手」が開催されました。当日は、非常に多くの反響をいただいた一方で、限られた時間の中で十分な質疑応答の時間を設けることができませんでした。

そこで、当日参加者の皆様から寄せられた数多くの質問に対し、講師のジャスティーン・ヴァリエール氏が帰国後、すべての質問へ目を通し、一つひとつ丁寧に回答を寄せてくださいました。本書は、その回答をまとめた特別 Q&A です。

【シンポジウム開催概要】

- ・日 時： 2026年4月29日（水・祝） 15:00–18:00
- ・会 場： 酪農学園大学 黒澤記念講堂
- ・主 催： 酪農学園大学
- ・基調講演：
ジャスティーン・ヴァリエール氏（米国モンタナ州野生動物・公園・魚類局 ベア・スペシャリスト）
- ・パネルディスカッション登壇者：
 - ・ジャスティーン・ヴァリエール氏、
 - ・佐藤 喜和（環境共生学類）
 - ・伊吾田宏正（環境共生学類）
 - ・立木 靖之（環境共生学類・モデレーター）
 - ・伊藤 哲治（環境共生学類）

第1章：野生動物との共生哲学と信頼関係の構築..... 3

- Q1：初対面の相手と信頼関係を構築する上で最も大切なことは何か？..... 3
- Q2：住民に適切な防除行動（誘引物の管理など）を促すためのアプローチは？..... 3
- Q3：協力的で強固な地域コミュニティを醸成するための戦略や秘訣は？..... 3
- Q4：キャンプ等のアウトドアレジャーによるクマ生息域への立ち入りをどう考えるか？..... 4
- Q5：他の地域と比べた、モンタナ州の軋轢管理（共生哲学）における最大の特徴は？..... 4
- Q6：ジャスティーン氏の描く「動物との共生・共存」の具体的なビジョンとは？..... 5
- Q7：クマへの許容度が低い住民へのアプローチと、対話において意識している方法は？..... 5
- Q8：クマの駆除に反対する人たちや動物愛護団体との向き合い方は？..... 5

第2章：モンタナ州における生態調査と管理技術..... 7

- Q9：生息地管理（ハビタット・マネジメント）の具体的な取り組み例は？..... 7
- Q10：管理計画の策定において、現在の個体数推定値をどの程度信頼しているか？..... 7
- Q11：グリズリー（ヒグマ）とアメリカクロクマの食性に大きな違いはあるか？..... 7
- Q12：クマの行動圏の広さと、短期的な移動距離（1日の移動量）の実態は？..... 7
- Q13：モンタナ州では熊鈴の携帯を推奨しているか、またその効果は？..... 8
- Q14：オオカミに対する住民の許容度や、オオカミが生態系にもたらす好影響とは？..... 8
- Q15：GPS首輪以外に行われている、モンタナ州の最新のクマ調査・監視技術は？..... 9
- Q16：適切な個体数や生息密度（保護区の内外での違い）についてどう考えるか？..... 9
- Q17：自然餌（堅果類など）が不作の年にクマの被害が増える傾向はあるか？..... 9
- Q18：日本（北海道）の生息密度がモンタナ州より高い理由と理想の密度とは？..... 10
- Q19：森林面積の減少や密集化が市街地への出没に与える影響と個体数管理の是非は？..... 10

第3章：現場における具体的な防除・衝突管理対策..... 12

Q20：誘引物の完全な除去が難しい場合、電気柵の設置で出没を防ぐことは可能か？	12
Q21：夜間に農地に侵入したクマの探知方法とドローンの運用実態は？	12
Q22：ドローンによる追い払い（ハイズ、haze）の際、音や光などの工夫はしているか？	12
Q23：ドアノブ等の防除資材を電化する際の費用負担や公的支援制度は？	12
Q24：クマの生息地と住宅地が隣接しているエリアで、最初に実施すべき被害対策は？	13
Q25：近年の気候変動による「冬眠しないクマ」への積雪期の防除対応策は？	13

第4章：野生動物マネジメントの政策・経済・キャリア 14

Q26：モンタナ州における野生動物専門職の人気や、主な就職先（行政機関など）は？	14
Q27：ベア・スペシャリストの募集頻度や、関連する専門職の選択肢は？	14
Q28：北米の視点から見た、日本の被害対策や組織運営における改善点への提言は？	14
Q29：野生動物保護に関する職種の給与水準や平均賃金との比較は？	15
Q30：クマ対策専門員となった新人が「1年目にやっておくべきこと」は何か？	15
Q31：行政や関係団体との連携・コミュニケーションにおいて最も重要なことは？	15
Q32：クマの駆除（致死処分）に対する市民からの抗議・苦情電話への向き合い方は？	16
Q33：モンタナ州において野生動物について専門的に学べる大学の環境は？	16
Q34：野生動物マネジメントの世界を志した「きっかけ」は？	16

第5章：野生動物管理の人間次元（Human Dimensions）と事例研究 18

Q35：冬眠中のクマを巣穴で駆除（捕獲）することに対する倫理的な見解は？	18
Q36：これまでに遭遇・対応した中で最も大きなクマのサイズは？	18
Q37：ジャスティーン氏が所属する組織（環境専門機関）の世代構成は？	18
Q38：野生動物保護のキャリアを目指す学生へのメッセージ	18
Q39：これまでのキャリアの中で最も印象深く、興味深かった住民との体験談	18

第 1 章：野生動物との共生哲学と信頼関係の構築

Q1：初対面の相手と信頼関係を構築する上で最も大切なことは何か？

自分の意見を押し付けたり、自分が正しいと証明しようとしたりすることに集中しないことです。誰もが「ただ自分の話を聞いてほしい」と思っています。その状況について自分がどう感じているかに関わらず、誰もが独自の考えや感情を持っており、自分はただ相手の言うことに耳を傾け、聞き届ける必要があるのだと念頭に置かなければなりません。相手を気遣っている姿勢を示し、その上で、安心できる事実をもって彼らの具体的な考えや感情に対処していくのです。最初に信頼関係を築いておけば、人々はこちらの考えやアドバイスにも耳を傾けてくれやすくなります。

Q2：住民に適切な防除行動（誘引物の管理など）を促すためのアプローチは？

その個人が「何によって動かされるのか（モチベーション）」を見極めることです。お金でしょうか？ 人の安全でしょうか？ クマの保護でしょうか？ 大抵の場合、人々はすぐに「孫のことが心配なんだ」「鶏小屋を作り直すのにもうこれ以上お金をかけたくないんだ」「クマにひどい目に遭ってほしくないんだ」といった本音を話してくれます。彼らの動機が分かれば、その懸念に合わせた解決策を提示できます。「もしお孫さんのことが心配なら、これ以上クマが侵入して人身安全のリスクが生まれないように、電気柵を設置しましょう」といったアプローチが可能になります。

Q3：協力的で強固な地域コミュニティを醸成するための戦略や秘訣は？

ベア・スペシャリストとして、コミュニティ内で名前を知られ、確固たる評判を築く必要があります。「信頼できる人だ」「すぐに駆けつけてくれる人だ」「クマとの軋轢の管理方法をよく知っている人だ」と地域の人々に知ってもらうことが大切です。人々はコミュニティ内で噂を交わすので、「あの人は信頼できるし、頼りになるし、仕事ができる」という評判は自然と広がっていきます。私は地域のイベントに顔を出したり、講演を行ったり、土地の所有者と1対1で協

力したりすることでこれを実践しています。自分をいつでも連絡が取れる状態にし、様々なレベルで人々をサポートし、助けの手を差し伸べます。一度信頼と敬意を得られれば、住民は非常に協力的になり、知識や情報を自ら広めてくれるようになります。私は人々に「隣人とコミュニケーションを取り、互いに支え合い、責任を持ち合おう」と促しています。人間とクマの軌轢管理は、集団での取り組みなのです。

Q4：キャンプ等のアウトドアレジャーによるクマ生息域への立ち入りをどう考えるか？

私が講演で「境界線を引く」と言ったのは、クマが家に侵入することを許してはならない、という意味です。人間の安全に関わる問題ですから、人間同士でもそんなことは許されませんよね。あいにくクマを送り込める「クマ専用の刑務所」はないため、家に侵入するようなクマは命を奪う（駆除する）ことになってしまいます。だからこそ、私は教育活動に全力を注いでいるのです。クマが軌轢を引き起こして殺されてしまう段階にまで至らないように、という願いを込めています。ご質問の「大自然の中でのレジャー」についてですが、たとえ町外れのトレイルであっても、屋外でのレジャーを選ぶ時点で「自分はクマの生息地に足を踏み入れているのだ」という認識を持つ必要があります。モンタナの住民にとって、それはここでの暮らしの一部であり、森で遊ぶ以上は「固有のリスクを背負っている」という共通の理解があります。だからこそ、ハイキング中に声を出して音を立てる、ベアスプレーを携帯する、テント内に食べ物を持ち込まないなど、軌轢を軽減するためにできる限りの準備をしておくべきなのです。これは車の運転と同じです。私たちは交通事故に遭う潜在的なリスクを負って運転していますが、シートベルトを締め、制限速度を守り、周囲に注意を払うことで、事故を軽減するためにできる限りのことをしていますよね。それと同じことなのです。

Q5：他の地域と比べた、モンタナ州の軌轢管理（共生哲学）における最大の特徴は？

モンタナ州では、市民の「ベア・アウェアネス（クマへの意識向上）」と教育に非常に大きな重点を置いています。クマの生息域で暮らすことは、ここモンタナの文化そのものです。講演、イベント、教育資材、講習などの量は非常に深く充

実しています。「ベア・アウェアネス月間」という丸1ヶ月を捧げる期間もあります。私たちはこの大自然と多様な野生動物を非常に誇りに思っているので、それを保護することが重要なのです。

Q6：ジャスティーン氏の描く「動物との共生・共存」の具体的なビジョンとは？

クマと人間が共に暮らす環境において、ある程度の軋轢が生じるのは避けられないことであり、必然です。ゴールは「すべての軋轢をなくすこと」ではなく、「それを最小限に抑えること」です。より良い共生を目指すのであれば、私たちがこれらの動物をどう捉え、彼らがこの土地で果たす役割（目的）をどう考えるかについて、市民の認識の転換を促す手助けをしなければなりません。

Q7：クマへの許容度が低い住民へのアプローチと、対話において意識している方法は？

クマやライオン、オオカミといった大型野生動物への許容度が低い住民の方々の対話において、私は最初から「彼らの見方や意見を変えてやろう」とは思わないようにしています。相手を指差して、何が間違っているか、何をすべきかを指示したところで、何の進展も得られないからです。まずは、その問題について対話を始められる「場」を作ることから始めます。変化は緩やかで、時間がかかるものです。人間関係を築くということは、最終的な結果を急がないということであり、一つのプロセスなのです。最初は、対話を生み出すための「何か共通の話題」を見つけることが重要です（たいていクマとは全く関係のない話です）。同じスポーツチームが好きだということで意気投合したり、同郷であることが分かったりするかもしれません。そうして会話を重ねて関係を築くことで、より深く、より重いテーマについて踏み込んだ議論をするチャンスの扉が開き、こちらの話にも耳を傾けてもらえる可能性が高くなります。相手の話をよく聞き、彼らの恐怖や不満に理解を示すことが重要です。そうした信頼があって初めて、事実や自分が効果的だと知っている知識をもとに見識を提供し、提案を行うことができます。

Q8：クマの駆除に反対する人たちや動物愛護団体との向き合い方は？

たとえ自分が同意できなくても、他者の視点にオープンであり、真摯に耳を傾け、彼らがどこからその考えに至っているのかを理解しようと努めなければなりません。その上で、何らかの妥協点（中間地点）を見出す努力をします。物事の表裏双方に、それぞれ正当な言い分があるものです。

第2章：モンタナ州における生態調査と管理技術

Q9：生息地管理（ハビタット・マネジメント）の具体的な取り組み例は？

生息地管理（ハビタット・マネジメント）とは、生態系や特定の種に利益をもたらしたり、それらを変化させたりするために、私たちが自然や土地を修正・操作することです。具体例としては、計画焼却（処方火入れ）や森林火災の管理、外来種の駆除、特定の植生の植樹や維持、水系の管理（例：ビーバーの再導入）や人工ダムの建設、選択的な木材の伐採などが挙げられます。

Q10：管理計画の策定において、現在の個体数推定値をどの程度信頼しているか？

私たちは個体数推定の数値を、主に「死亡率の上限（しきい値）」を設定するために使用しています。個体数が目標サイズを大きく上回っている場合は、管理に柔軟性を持たせることができます。逆に、個体数サイズが目標値に近い場合は、非常に慎重（保守的）にならなければなりません。また、私たちは「不確実性（データのエラーバー）」も考慮に入れているため、不確実性が高ければ高いほど、より慎重な判断を下すようにしています。

Q11：グリズリー（ヒグマ）とアメリカクロクマの食性に大きな違いはあるか？

彼らはほとんど同じものを食べています。ただ、グレイシャー国立公園の一部のグリズリーは、山の高い場所にある頁岩（けつがん）の岩場に生息する「ヨトウガの仲間（Army cutworm moths）」を食べます。これは非常に優れたタンパク質源なのですが、クロクマがこのガを採食している事例はこれまでに確認されていません。

Q12：クマの行動圏の広さと、短期的な移動距離（1日の移動量）の実態は？

誤解を与えてしまっていたら申し訳ありません。私が（講演の）スライドでお見せした、GPS首輪の全プロットを表示した地図は「10年間に蓄積されたデータ」

です。一般的にクマは広い行動圏（ホームレンジ）を持っており、その気になれば1日でかなりの距離を移動できます。通常、メスの行動圏は比較的狭く50～150平方マイル（約130～390 km²）ほどですが、オスははるかに広範囲を動き回り、その行動圏は最大600平方マイル（約1550 km²）に達することもあります。食べ物の有無や繁殖期に応じて、クマは1日に20～40マイル（約32～64 km）移動することもあります。

Q13：モンタナ州では熊鈴の携帯を推奨しているか、またその効果は？

私たちクマの専門家は、熊鈴がそれほど有用だとは考えていません。熊鈴は小さなチリンチリンという音に過ぎず、風の音で簡単にかき消されてしまうからです。クマは人間を本能的な「危険」または「脅威」として認識しているため、「人間の声」こそが最高の忌避効果を発揮します。確かに一部のクマは「鈴の音＝人間」と結びつけるようになるかもしれませんが、私はクマを遠ざける手段として鈴を頼りにすることはありません。こちらでは人々に熊鈴を推奨していません。

Q14：オオカミに対する住民の許容度や、オオカミが生態系にもたらす好影響とは？

オオカミは、私がこれまでに見てきた中で、人間からの許容度が最も低い動物の一つです。彼らは激しく誤解され、迫害されています。「悪い大きなオオカミ」の物語や寓話は、何世代にもわたって語り継がれてきました。人間は自分が完全に理解できないものを恐れる傾向があり、普段目にしないものや関わりのないものについては理解が及びません。オオカミは人目を忍ぶ性質（神出鬼没）があり、その神秘性が人々を恐怖させます。悲しいことに、地方の農村地域ではオオカミに対する市民の許容度は低いですが、都市部やそこに住む人々は比較的高い許容度を持っています。オオカミが人間の安全に直接的な脅威を与えることはありません。大自然（の危険な野生動物）の中で、最も恐れる必要がない動物がオオカミです。また、彼らは最高次捕食者（エイペックス・プレデター）であり、彼らが存在することで健康でバランスの取れた生態系が直接的に維持されています。オオカミは（獲物となる動物の）病気の管理や有蹄類の個体数調整を助けており、その結果として、健全な植生の成長や鳴鳥の個体数増加などがもたらされ

ます。これこそが、皆さんが耳にする「トロフィック・カスケード（栄養段階の連鎖作用）」が機能している現場なのです。

Q15：GPS 首輪以外に行われている、モンタナ州の最新のクマ調査・監視技術は？

私たちは「わな設置場所用送信機（トラップサイト・トランスミッター）」を使用しており、クマが罠にかかって扉が閉まるとリアルタイムでEメールが届く仕組みにしています。また、携帯電波式のトレイルカメラを使って、軋轢の発生をリアルタイムで確認したり、罠の状態をチェックしたりしています。グリズリーについてはすべての個体の右耳の後ろにマイクロチップを埋め込んでいるため、捕獲した際にスキャンして番号を照会すれば、データベースからその個体の過去の履歴をすぐに確認できます。さらに、クマの場所の特定、監視、または追い払い（ヘイズ、haze）を行う手段として、ドローンの人気もますます高まっています。

Q16：適切な個体数や生息密度（保護区の内外での違い）についてどう考えるか？

この質問については、モンタナ州のグリズリーの動向・個体数調査の第一人者である研究員、セシリー・コステロ（Cecily Costello）に見解を求めました。

「生息密度は地域（景観）によって一定ではないため、私たちは単一の『数値』を目指して管理してはおりません。核心的な保護区（コアエリア）の景観においては、クマの個体数が高い密度に達することを許容しており、データからもこれらのコアエリアでは密度依存的な効果（過密による自然な抑制）が生じていることが示唆されています。これらの効果を確認できることこそが、個体数が『回復した』と私たちが判断する根拠の一部となっています。このような高い密度に達することができるのは、遠隔地にある広大な保護区が存在するからです。一方で、これらの保護区の外側では、クマは人間活動に起因する高い死亡率にさらされるため、密度はそれほど高くなりません。こうしたエリアでの密度は、人間の許容度によって決定される要素が大きくなります。」

Q17：自然餌（堅果類など）が不作の年にクマの被害が増える傾向はあるか？

はい。自然の食べ物が不作の年は、人間とクマの軋轢が増える傾向にあります。クマは冬を越すためにできるだけ体重を増やそうと必死になるため、人間が外に放置した「手っ取り早く手に入る食べ物（誘引物）」を探し求めるようになるからです。

Q18：日本（北海道）の生息密度がモンタナ州より高い理由と理想の密度とは？

この質問についても、個体数調査の第一人者であるセシリー・コステロに見解を求めました。「『理想的な密度』というものは存在しません。日本でなぜこれほどまでに生息密度が高いのかについては、推測することしかできません。もしかしたら（森林の）餌の生産性が非常に高いのかもしれないし、あるいはクマたちが異なる生活史戦略（例えばクロクマに近い生態など）を採用しているのかもしれない。もしくは、競争相手となる他のクマの種がないことが、高い密度に達することを可能にしているのかもしれない。もし保護区があまり利用できない、あるいは規模が小さいのであれば、密度を制限することがより必要になるかもしれません。理想的な数値とは、結局のところ、種の『長期的な存続』と『人間の許容度』のバランスをいかに取るか、ということになります。なお、正確な個体数推定値を得るためには、北海道全域での DNA サンプルの収集、DNA による個体識別・再捕獲法（マーク・リキャプチャー）、広範囲での首輪の装着、死亡率の追跡、そして生息地の評価とモデリングを行う必要があります。」

Q19：森林面積の減少や密集化が市街地への出没に与える影響と個体数管理の是非は？

クマの生息地が失われれば失われるほど、軋轢の発生件数が高くなるのは間違いありません。私たちは彼らの家（生息地）を破壊して自分たちの家を建てておきながら、「そこにクマが現れないこと」を期待するわけにはいかないのです。私たちは、周囲を彼らの天然の食べ物に囲まれた、彼らの生息地の一部である生態系の中で暮らしています。クマの密度が高くなり、森林面積が狭くなれば、クマがより多くのスペースや天然の食べ物を求めて他のエリア（人間の生活圏など）に押し出され始めるのはごく自然なことです。あらゆる場所には、それぞれの「生物学的収容力（その個体数を維持できる自然資源の限界）」があり、もし人間が関与していなければ、自然は自らバランスを取ります。しかし現実には、私たち人間が野生動物の個体数に非常に深く関与し、影響を与えています。

だからこそ、生息地の保護（ハビタット・プロテクション）も極めて重要なのです。私たちは、これらの種のために野生の空間を守り、残していく必要があります。

第3章：現場における具体的な防除・衝突管理対策

Q20：誘引物の完全な除去が難しい場合、電気柵の設置で出没を防ぐことは可能か？

電気柵の素晴らしいところは（正しく設置され、クマを遠ざけるのに適切な電圧である8,000から10,000Vが出力されている限り）、それが「物理的な法則（物理ショック）」であるという点です。その強烈な電気ショックのレベルゆえに、クマがその拒絶刺激を克服して乗り越えることは事実上不可能です。

Q21：夜間に農地に侵入したクマの探知方法とドローンの運用実態は？

夜間に活動するクマもいれば、昼間に活動するクマもいます。それは地域や、そのクマの気質、あるいは人への慣れの度合い（馴化）によって異なります。一部の牧場主は、家畜の群れに24時間年中無休で付き添う「レンジライダー（放牧監視員）」を雇っており、これがクマを遠ざけるのに効果を発揮しています。また、家畜保護犬（ライブストック・ガーディアン・ドッグ）を導入している農家や牧場主もおり、これも非常に高い効果を上げています。ちなみに、私が知る限り、ドローンを使った活動は日中に行われています。

Q22：ドローンによる追い払い（ハイズ、haze）の際、音や光などの工夫はしているか？

ドローンでクマを追尾し、追い払います。もしクマがドローンに慣れ（馴化し）始めてしまった場合は、スピーカーから様々な異なる音を流したり、ストロボライトのようなアタッチメントを装着したりして、やり方を変えることで「目新しさ（警戒感）」を作り出します。

Q23：ドアノブ等の防除資材を電化する際の費用負担や公的支援制度は？

私は、住民がすぐに対策機器を手に入れられない場合、当面の間無料で貸し出せる機材をたくさん持っています。こちらには、経済的に余裕のない人々を対象

に、費用を共同負担（補助）するプログラムが数多く存在します。もし資金的に問題のない人であれば、自費で購入してもらうことになります。

Q24：クマの生息地と住宅地が隣接しているエリアで、最初の実施すべき被害対策は？

すべての「誘引物（引き寄せもの）」を適切に管理・保護することです。ゴミ、鳥の餌箱、家畜、農作物（可能な場合）などを、電気柵や耐ベア仕様のコンテナ（ゴミ箱）などを使って確実に遮断します。

Q25：近年の気候変動による「冬眠しないクマ」への積雪期の防除対応策は？

モンタナのクマの大半は、今でもきちんと冬眠しています。ただ、冬眠に入るのが遅かったり、早く目覚めたりといった個体差は多少あります。中には、一度起きて巣穴を出たものの、また戻っていくクマもいます。通常、私たちが雪の降る時期にクマの軌跡に対処することがあるとすれば、それは冬の入り口である12月頃です。雪が積もると電気柵の機能に問題が生じることはありますが、私たちのエリアでは通常そこまで大きな問題にはなりません。そのような（積雪期の）状況では、プラス極のワイヤーだけでなく、プラス極とマイナス（接地）極のワイヤーを交互に配置する「通電線・接地線交互配置システム」にすれば、単なる通電線だけのシステムよりも効果的になります。理想を言えば、住民が「耐ベア仕様のコンテナ」を、年間を通じて（冬期も）使い続けることです。

第4章：野生動物マネジメントの政策・経済・キャリア

Q26：モンタナ州における野生動物専門職の人気や、主な就職先（行政機関など）は？

非常に人気のある役職であり、野生動物に関わる仕事には多くの異なる種類が存在します。米国森林局（US Forest Service）や国立公園局（National Park Service）、また様々な民間組織もそれぞれ独自の野生動物生物学者を雇っているため、州政府以外にも働ける機関がたくさんあります。

Q27：ベア・スペシャリストの募集頻度や、関連する専門職の選択肢は？

ベア・スペシャリストのポジションは非常に人気が高く、誰もが憧れる職種であるため、募集が出ることは滅多にありません。しかし、クマの動向調査や研究を行うポジション、国立公園内でクマに対応するポジション（パークレンジャー）、あるいは「People and Carnivores（人と肉食獣）」や「Defenders of Wildlife（野生動物の守護者）」といった様々な団体における、クマとの軋轢軽減を担当するポジションなど、クマに関連する仕事は州全体のいたるところに存在します。

Q28：北米の視点から見た、日本の被害対策や組織運営における改善点への提言は？

町の境界線（郊外）や、クマの移動経路（コリドー）、そして農村地域において、「耐ベア仕様のコンテナ」を導入することが必要だと思います。また、それらの地域でのゴミ収集の時間帯を日中の遅い時間に変更すれば、クマがまだ活発に動き回っている可能性のある早朝の時間帯における、人間との遭遇リスクを最小限に抑えることができるため効果的でしょう。さらに、家畜の囲いや農地の周囲への電気柵の設置を進めること。人間とクマの軋轢や、クマの生物学・行動に関する市民への教育を増やすことは、非常に有益だと思います。北海道ではクマに対して、多くの恐怖心や許容度の低さ（不寛容）があるように見受けられます。軋轢を軽減する方法についての知識や、クマ全般に関する基礎的な知識を

増やすことで、軋轢そのものを減らし、結果として管理のための駆除数を減らすことにつながるはずです。また、トレイルの周辺には「ここはクマの生息地である」と警告し、音を立てることやベアスプレーの携帯を促す標識（看板）を増やすことも必要だと思います。

Q29：野生動物保護に関する職種の給与水準や平均賃金との比較は？

正直に言うと、あまり良くありません。給与水準は各州によって異なりますし、連邦政府（国）で働いているか、州政府で働いているかによっても変わります。一般的には、連邦政府の仕事の方が州政府よりも給与が高いです。残念ながら、モンタナ州は（野生動物職の）給与が比較的低い州の一つです。

Q30：クマ対策専門員となった新人が「1年目にやっておくべきこと」は何か？

クマの経験が豊富で、その行動を熟知している地元のクマ生物学者（先輩たち）と会い、経験者から学べる限りのことをすべて吸収してください。だからといって、その人たちの言うことすべてが常に100%正しいとは限りませんが、時間が経ち、自分自身の経験を積んでいくことで、何が効果的で何がそうでないかを自分で抽出（判断）できるようになります。何か疑問が生じたときにいつでも頼れる「リソース（相談先）」になってくれるため、今のうちに横のつながり（コネクション）を作っておくことは非常に良いことです。この仕事をしばらく続けていけば、あなた自身の経験からさらに多くの知識を得ることができ、学んだすべてのことを活かして、自分自身の道を切り拓いていくことができるようになります。この仕事において学ぶことが終わる日はありません。常に新しい課題に直面し続けることになるでしょう。

Q31：行政や関係団体との連携・コミュニケーションにおいて最も重要なことは？

良好な協力関係と「信頼」を持つことです。お互いが同じ認識（前提）を共有できるように透明性を持って頻繁にコミュニケーションを取り、各自が自分の仕事に責任を持ち、それぞれの具体的な任務や役割を果たしてくれると互いに信頼し合うことが大切です。

Q32：クマの駆除（致死処分）に対する市民からの抗議・苦情電話への向き合い方は？

軋轢を理由にクマを致死処分（駆除）せざるを得なかった場合、私たちのもとにも多くの誹謗中傷の電話やメッセージが届き、人々は非常に激怒します。しかしその一方で、「なぜもっとたくさんのクマを殺さないんだ」と言って怒る人たちもいます。現実として、人々はどちらに転んでも、何かしらの形で怒るものなのです。ベア・スペシャリストとして重要なのは、こうした決定を「社会的な圧力（世論）」に基づいて下すのではなく、自分たちの「専門知識」に基づいて下すことです。

Q33：モンタナ州において野生動物について専門的に学べる大学の環境は？

常に一般的です。野生動物生物学（Wildlife biology）やそれに関連する野生動物研究は、米国全般で非常に人気のある学位であり、特にモンタナ州、アイダホ州、ワイオミング州、ワシントン州、コロラド州、メイン州などの、豊かな野生動物に恵まれた自然の多い州では特に盛んです。

Q34：野生動物マネジメントの世界を志した「きっかけ」は？

私は幼い頃からずっと「野生動物に関わる仕事がしたい」と思っており、オオカミやサメ、クマといった生き物の存在に惹かれていました。17歳の夏、アラスカのデナリ国立公園でトレイル（登山道）整備の短期アルバイトをしていたとき、初めて調査用の首輪をつけたオオカミを見ました。その際、クマの生物学者が私たちにクマの安全対策についてレクチャーをしてくれたのですが、「うわあ、なんて格好いい仕事なんだろう！」と思ったのを今でも覚えています。大学時代には、野生動物の保護・リハビリセンターでのインターン、オオカミの保護区、フィジーでの海洋調査プロジェクト、動物病院、オオカミの管理業務など、野生動物に関わる様々な分野を経験してみました。これらをすべて試したことで、自分のキャリアにおいて「やりたいこと」と「やりたくないこと」を見極めることができました。私は、個体数をカウントしたり、研究やデータ分析を行ったりすることよりも、野生動物に関わる「人間の側面（ヒューマン・ディメンション：人の意識や社会との調整）」にはるかに強く惹かれている自分に気づきま

した。そしてクマの軋轢管理という仕事に出会い、それ以来ずっとこの道を突き進んでいます。

第5章：野生動物管理の人間次元（Human Dimensions）と事例研究

Q35：冬眠中のクマを巣穴で駆除（捕獲）することに対する倫理的な見解は？

私個人としても、クマが巣穴で冬眠している最中に間引き（駆除）を行うことの倫理的な是非については、非常に葛藤を覚えます。それは、ここモンタナ州では決して行われたいやり方です。もし（純粋に）個体数を減らしたいだけであれば効果的な方法かもしれませんが、必ずしも「倫理的」であるとは言えません。

Q36：これまでに遭遇・対応した中で最も大きなクマのサイズは？

私がここ（モンタナ）で直接麻酔をかけたりして扱った中で最も大きかったクマは、およそ300kgでした。モンタナ州の他の地域にいるクマの中には、350～360kgに達するものもいます。

Q37：ジャスティーン氏が所属する組織（環境専門機関）の世代構成は？

私たちの組織には、若い人（18歳）から70代の方までいます。具体的な職務内容によって、その年齢層は様々です。

Q38：野生動物保護のキャリアを目指す学生へのメッセージ

多様な知識を身につけるために、野生動物の様々な異なる分野で働いてみてください。一つの種だけに集中して固執してしまわないことです。多くの種について学ぶことは素晴らしい財産になります。様々な生き物との多様な経験を積むことで、自分が将来どの仕事を選び、どの種と関わりたいのか（あるいは関わりたくないのか）を、はっきりと絞り込めるようになっていきます。

Q39：これまでのキャリアの中で最も印象深く、興味深かった住民との体験談

本当にこれまでにたくさんの経験をしてきたので、際立っているものを数個だけ選ぶというのは難しいですね。心を引き裂かれるような、今でも胸に深く残っている経験もたくさんありますが、それらはここでは伏せておきます。ただ、これ

だけは言えます。クマに対する許容度が全くなかった人と一緒に仕事をしていく中で、その人がクマとの肯定的な（良い）経験をし、その人の感情がガラリと変わる瞬間を見届けるのは、本当に素晴らしい気分です。状況にもよりますが、誰かの敷地内でクマを捕獲しなければならないとき、私は土地の所有者の方と一緒にクマの処置（体重測定やデータ収集など）を行うことがあります。土地の所有者が私を手伝い、実際にクマに触れることで、彼らはその経験を通じてクマとの個人的なつながりを感じ、より深い理解を抱くようになります。その変化のプロセスを見守ることは、本当に特別な瞬間です。